

養液栽培によるキュウリの周年多収栽培

1. はじめに

キュウリは全国でも養液栽培の実績が少なく、トマトのような大規模経営体はごくわずかです。また、生産量は年々減少傾向で、当面はその傾向が続くとみられます。そこで、トマトに次ぐ新たな大規模周年作の品目として、スプレーポニックシステムを用いた養液栽培と環境制御による周年多収栽培技術を開発しました。

2. 作型と品種

2月下旬、7月上旬に定植する2作型体系と

作型	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	収量
R2実績													10a 32t

します。品種は、2月植では‘超・彩軌’または‘フレスコ100’、7月植では‘超・彩軌’が適します。

3. 栽培施設

真夏にも栽培するため、遮光のほかに気化冷却装置が必要です。栽培ハウスには、有圧ファンダクト併用型パット&ファンまたは、細霧冷房装置(セミドライミストタイプ)を装備します。



4. 栽植方法与整枝・誘引方法

整枝は1株1本仕立て、つる下ろし整枝とします。株間12.5cmで定植、枝は2条に振り分け、枝間は25cmとします。栽植密度は3,200株/10a程度になります。1株1本仕立てとすることで、一般的な子づる4本仕立てと比べて初期から多収となります。

5. 施肥

施肥は、ECを調整して行います。定植後1.0からスタートし、収穫開始まで徐々にECを上げます。その後は、EC 2.2程度の一定管理です。pHは栽培期間を通じ6.0~6.5を維持します。肥料は、スプレーポニック栽培のキュウリ処方を用いました。

6. 収量

定植	収穫	可販収量 (10aあたり)
2月19日	R2.3月19日～6月30日	14.9t
7月7日	R2.8月3日～R3.1月30日	16.9t
合計		31.8t

2作合計で、10aあたり約32tの可販収量が得られます。

定植後 日数	設定値	
	EC(mS/m)	pH
0	1.0	下限 5.5 上限 6.0
3	1.1	
6	1.2	
9	1.3	
12	1.4	
15	1.5	
18	1.6	
21	1.7	
23	1.8	
25	1.9	
27	2.0	
29	2.1	
31	2.2	

施肥管理の目安